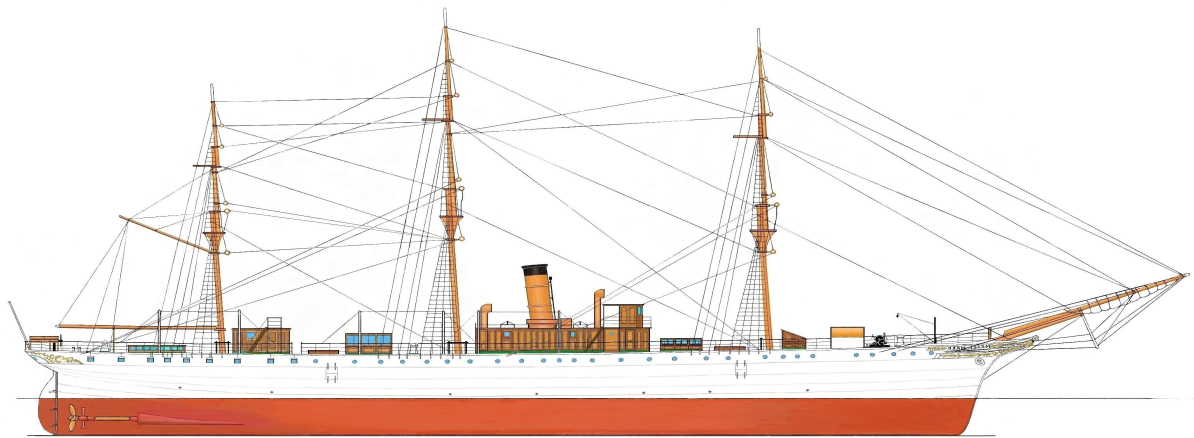


# Ocean

## 海洋塾機関誌第24号



日本海洋塾のURL



Ocean記載のURL

令和5年4月10日

特定非営利活動法人 **日本海洋塾**

日本海洋塾は、世界を結ぶ海と船を、広く皆様に伝える活動により、海洋立国意識の拡充を目指しています。



## § ≪白菊の歌≫と校内練習船 §

一般会員 福谷恒男

♪♪♪

紅顔可憐の美少年が 商船学校の校内の  
練習船のメンマスト トップの上に立ち上がり

これは「白菊の歌」の2番の歌詞。ここに出て来る校内練習船とは陸上に設けられた帆船のことで、洋上に浮かぶ本物の船よりも安上がりで造られ、生徒はこのマストやロープを操って操船の訓練にいそしんでいました。今どきの操船シミュレーターの先駆けともいうことができます。

この歌が作られた当時(明治37、8年頃)の商船学校は、東京にある商船学校のほかに鳥羽、大島、広島に限られていました。それらの中で陸上帆船が存在するのはいわゆる地方の商船学校で、本物の帆船を所有する学校もあり、訓練航海の傍ら貨物などを輸送して校費の助けとしていたこともあるようです。しかし発展途上にあった造船技術や貧弱な気象情報のため海難事故を起こし尊い若い命が失われることがしばしばありました。これは地方の商船学校のみに見られたことではなく、東京の商船学校でも起こり、世論の後押しによって練習帆船「大成丸」ができた経緯はよく知られています。陸上帆船といっても水面上(地面上)の構造物は実物と何ら変わることはなく、単に動かないだけの相違であって、転覆と沈没の危険は全くなく、その優美な姿が校舎の一部として景観にとけこんでいたことは当時の写真からもうかがえます。

さてこの船上で、自習時間を抜け出して雑談にふけていた少年たちは一体どのような年齢だったのでしょうか。旧制中学を卒業して、あるいは地方の商船学校を卒業して入学した東京の商船学校の学生はかなりの年増であって、とても「紅顔可憐」と言うには程遠かったような気がします。故郷の父母やあこがれの女性を想って涙にくれるようでは、それこそがこの歌の大いに流行った理由でもあります。曲中に挿入されている漢詩の武骨さとはすこし違和感があるような気がします。一般に少年という場合15歳程度までという見解が多く見かけられますが、明治の終わりごろ「少年」の語が表す年齢層は果たしていかなるものであったでしょう。この少年たちは話に夢中になって時のたつのも忘れ、点呼のラッパで我に返り急いで寮に帰ったようですが、果たして怖い教官の待ち受ける点呼に間に合ったかどうか心配です。

ところでこの歌の7番と8番の間に挿入されている「題壁」という漢詩の作者について、重大なミスをおかしていたことが最近分かりました。この詩はてっきり僧月性の作だとばかり思っていました。筆者は大島商船の『八十年史』を読んでいて、「白菊の歌」の作者は大島商船学校の航海科9期生青山静純氏といわれていることを知り、それ以来この歌について調べてきました。山口県立図書館で『山口県立萩高等学校百年史』の中に「白菊の歌」の原曲とされる「萩中学校開校記念

歌」を見出した時には確かな手応えを感じたものです。

一方この漢詩については好き勝手に改変されているようなので調査上あまり重要視しないことに決めていました。ひどいになると曲の始まりの所で朗々と唸るものまであります。しかし全く無視するわけにもいかず、また自宅から近いためもあって何度か妙円寺を訪ねて展示室のいろいろな書のたぐいを眺めて回りました。僧月性は郷土の志士として称えられ、この詩の立派な石碑も境内にあります。ところがインターネットで調べてみるとこの詩は伊勢山田の勤王の志士村松文三の作で、月性の号が清狂・文三の号が青狂と酷似しているため、この詩を書き遺した『近世名家詩鈔』の編者(巖谷一六と薄井竜之)が月性の作であると誤記したことによるそうです。編者自らもその誤りを認めているということで何をかいわんやです。詩人の大岡信氏や国語学者の大槻文彦氏は村上文三の作であると説かれています。

世に「百聞は一見に如かず」という諺があり、白屋堂々と建っている石碑に感服して見入っていたのに、これも剽窃のたぐいとなると考え込まざるを得ません。しかし月性にはこの漢詩を自分の作にしようとした「故意」はなく、またこの誤記を訂正することをしなかったというような「過失」もなく、本人は何ら責められるものではありません。この漢詩の作者が誰であるかということは「白菊の歌」の作者の問題には本質的な影響は及ぼさないはずです。京都府精華町にある国立国会図書館関西館にはマイクロフィッシュがないので、地階の書庫から運ばれてくる膨大の量の明治後期の文芸雑誌をめくっては、時折随所に出て来る有名な詩歌にふと見とれたりしながら始めた文献漁りの旅は、牛歩のごとく今までどおり続けたいと思っています。

「白菊の歌」の舞台が山口県周防大島町であるという説は小松の地名に依拠しているようですが歌詞の中にある「小松が原」というのは少し創作が入っている感じがします。あの付近の地形は山がすぐに海岸に迫っていて「小松が原」という語はふさわしくありません。「小松が浜」という方が多少現地の状況を反映していますがこの呼び名もあまり使われていません。「(小松が原に打ち寄する) 岸打つ波の音高く・・・」は現状をよく伝えています。ここは急潮流で知られる大島瀬戸の岸辺で、5月の大潮の時などは特に顕著な潮騒が聞かれます。またこの瀬戸は風も強く潮流の向きが風の向きに逆らうときには、租度の峻しい風波が生じ、この波が岸辺を打つときは恐ろしいほどの音を立てます。また大島商船で歌われているものでは「犬の遠吠えかすかなり」の繰り返しがなく代わりに「松吹く風の声荒し」となっていますが、この瀬戸を吹き抜ける風がもたらす松籟もかなりのものです。

この春(2023年)大島商船高等専門学校では新しい練習船大島丸を迎えました。これは従来の慣習に従って校内練習船と呼ばれていますが、その由来は海技教育機構(旧航海訓練所)の少し大きな練習船と区別するため、こんないい船ができるとは思っていませんでした。さて若者たちにこの船がどんな夢を与えてくれるでしょうか。

## § 帝国海軍軍楽隊と校歌 §

会員 佐藤勝二郎

### 1. 海軍軍楽隊の校歌指導

商船学校寮歌「白菊の歌」に関連して、高等商船学校に於いて「寮歌」がどのような扱いになっていたか、高等商船学校の同窓会誌である「海洋」を紐解き調べていると、戦前の昭和時代に帝国海軍軍楽隊が東京高等商船学校に赴き演奏会を行い、その時に校歌「暁にひびく」を演奏し、歌唱指導している記事が数件あったので纏めてみた。

### 2. 演奏会の記録

海洋会誌「海洋」の記事の中に東京高等商船学校の様子を報じる「越中島だより」に演奏会の模様が記されている。内容は、曲目だけではなく曲の解説や論評迄書かれたものがあるが、出来るだけ忠実に抜粋し、一部修正を加えたものが囲みの中のものである。神戸高等商船学校の「深江だより」には、軍楽隊演奏会の記事が昭和18年8月31日の一回のみである。

軍楽隊の演奏会は時代が進むと、各国の国歌や軍歌が登場するようになり、だんだん戦争へ向かっていることが感じられる。校歌や軍歌の演奏や練習はあるが、寮歌の演奏や練習はなく、ましてや巷のはやり唄でもあった「白菊の歌」は演奏されていない。

#### (1) 曲目

曲目を見ると行進曲、円舞曲の他にあまり見聞しない序曲、小夜曲、描写曲、幻想曲、組曲、接続曲、狂騒曲、意想曲 変奏曲等と多種あり、筆者には理解できない音楽の世界になるが、これらは外航船の士官は「無冠の外交官」と云われた、その卵たちに寮歌や軍歌ではなく外国音楽に馴染ませる目的があったのではないかと想像するのである。

現在、東京海洋大学の学生祭で、ステージの出し物の一つに「寮歌斉唱大会」が行われているが、そこでは寮歌ではないシーシャンティの「Sailing Sailing」が歌われるのも、国際感覚の涵養に役立っているのではないかと思うのである。

#### (2) 校歌

演奏された校歌は昭和9年に作られた北原白秋作詞、山田耕筰作曲の「東京高等商船学校校歌」(暁にひびく)であり新校歌と呼ばれた。新校歌が出来るまでの作詞・作曲者の不明の「商船学校校歌」(総帆追風に)は旧校歌と呼ばれるようになった。

#### (3) 指揮者

指揮者内藤清五は明治39年海軍軍楽隊に入り、瀬戸口藤吉、吉本光蔵に師事。その後東京音楽学校に学び、昭和4~20年同校嘱託。軍楽少佐。

海軍軍楽隊以後は東京都消防庁音楽隊長となり、37年まで務めた。

年月日：昭和6年12月17日	4. 西班牙舞曲「ホタナラバ」
イベント名：端艇撓漕大会終了後 海軍軍楽隊演奏会	5. 円舞曲「ドナウ河の漣」
会場：柔剣道々場	6. 描写曲「森の鍛冶屋」
指揮者：福喜多楽長指揮	7. 喜歌劇「福の神」
曲目：	8. 番外 東洋舞曲「キスメット」
1. 行進曲「後甲板にて」	9. 番外 蝶々夫人
2. 序曲「ウイリアム・テル」	10. 行進曲 軍艦
3. 小夜曲 ニツ	11. 君が代
その美はしき樂の音は若き生徒の異情なる感激に迎えられ、競漕による疲労を充分に慰し、且つその情操教育上最大の効果を納めた。	

年月日：昭和10年1月8日	4. 円舞曲 波路を越へて ロザース作曲
イベント名：閲兵式後 海軍軍楽隊の演奏	5. 海の護り 江口源吾作曲 武富邦重海軍大佐作詞
会場：生徒寮道場	6. 偉大なる武人 海軍軍楽隊作曲
指揮者：岸本軍楽隊長指揮	7. <b>校歌（暁にひびく）</b>
曲目：	
1. 君が代	
2. 観艦式行進曲 佐藤清吉作曲	
3. ウイリアムテル ロッシーニ作曲	

年月日：昭和10年7月12日	4. 描写的幻想曲 「コロンブス」 ハーマン作曲
イベント名：海軍軍楽隊 吹奏樂の演奏	5. 護国の軍神東郷元帥 酒井少佐作詞 海軍々楽隊作曲
会場：生徒寮道場	6. 組曲「埃及」
指揮者：内藤清五指揮	7. 行進曲 「愉快的鍛冶屋」 ベーターズ作曲
曲目：	8. <b>東京高等商船学校々歌</b> 海軍々楽隊編曲
1. 君が代	
2. 国歌 満、英、米、佛	
3. <b>軍歌</b>	
イ. 皇軍の歌	
ロ. 海軍記念日の歌	
ハ. 如何に強風	
ニ. 海行かば	
曲目3の四つは演奏につれ全校生がこれに和し軍歌の練習を行った。 校歌を軍楽隊に和して歌う時にはその秀逸なる事を知ると同時に山田耕筰氏の苦心の程も察せらる。	

年月日：昭和11年1月9日	5. 演奏
イベント名：観閲式後 海軍々楽隊演奏	イ. 行進曲 「正々堂々たる軍容」 エルガー作曲
会場：本校講堂	ロ. 序曲 「學國の歡喜」 海軍々楽隊作曲
指揮者：？	ハ. 円舞曲 「ドナウ川の漣」 イヴノウイッチ作曲
曲目：	ニ. 邦楽 「都の春」 海軍々楽隊編曲
1. 君ヶ代	ホ. 接續曲 「勇敢なる日本兵」 海軍々楽隊編曲
2. 外国々歌 (独逸、メキシコ、ブラジル)	
3. 軍歌	
イ. 楠公父子	
ロ. 黄海々戦	
ハ. 櫻花	
軍歌は全生徒合唱練習を行った	
4. 校歌 海軍々楽隊編曲	
最初軍楽隊の楽曲演奏ありて後生徒の練習	

年月日：昭和11年7月4日	4. 演奏
イベント名：海軍々楽隊 吹奏楽の演奏	イ. 行進曲「空軍の威力」 海軍軍楽隊作曲
会場：道場	ロ. 狂騒曲「エチオピア」 ホスマー作曲
指揮者：内藤清五指揮	ハ. 圓舞曲「永遠の感興」 ガン作曲
曲目：	ニ. 邦楽長唄「勸進帳」 海軍軍楽隊編曲
1. 君が代	ホ. 意想曲 「日本海々戦の想ひで」 海軍々楽隊編曲
2. 外国々歌	へ. <b>東京高等商船学校々歌</b> 海軍々楽隊編曲
イ. 満洲国、ロ. 英、ハ. 米、	
ニ. 獨、	
3. 軍歌（生徒練習）	
イ. 閉塞隊、ロ. 元寇、	
ハ. 黄海ノ大勝	

満洲国は昭和7年（1932年）3月1日に、関東軍主導で中国大陸の東北部に建国された国。1945年8月24日に滅亡した。

演奏された国歌は、1933年（昭和8年）2月24日制定の「大満洲帝国国歌」であり、作詞は國務院総理：鄭考胥、作曲は満州国文教部選（実態は高津敏・園山民平・村岡樂童の合作）の曲となる。

1942年（昭和17年）9月5日に、また新たな三番目の国歌が制定された。

年月日：昭和12年1月10日	3. 行進曲 観艦式 海軍々楽隊作曲
イベント名：閲兵式終了後演奏を聞く	4. 序曲 軽騎兵 ズッペ作曲
会場：講堂	5. 圓舞曲 大洋の夢 ゲングル作曲
指揮者：？	6. 長唄 越後獅子 海軍々楽隊編曲
曲目：	7. 接続曲 海上の生活
1. 君が代	ビンディング作曲
2. 外国々歌	8. <b>本校校歌（合唱）</b>
イ、満洲国 口、暹羅国	
ハ、米国 二、伊国	
海軍々楽隊の演奏終わって、生徒は軍楽隊の指導の下に校歌の練習を行ふ。	

国名：暹羅國 シヤム国は1939年（昭和14年）にタイ王国に国名が変更された。東南アジアで列強の植民地にならなかった唯一の国である。

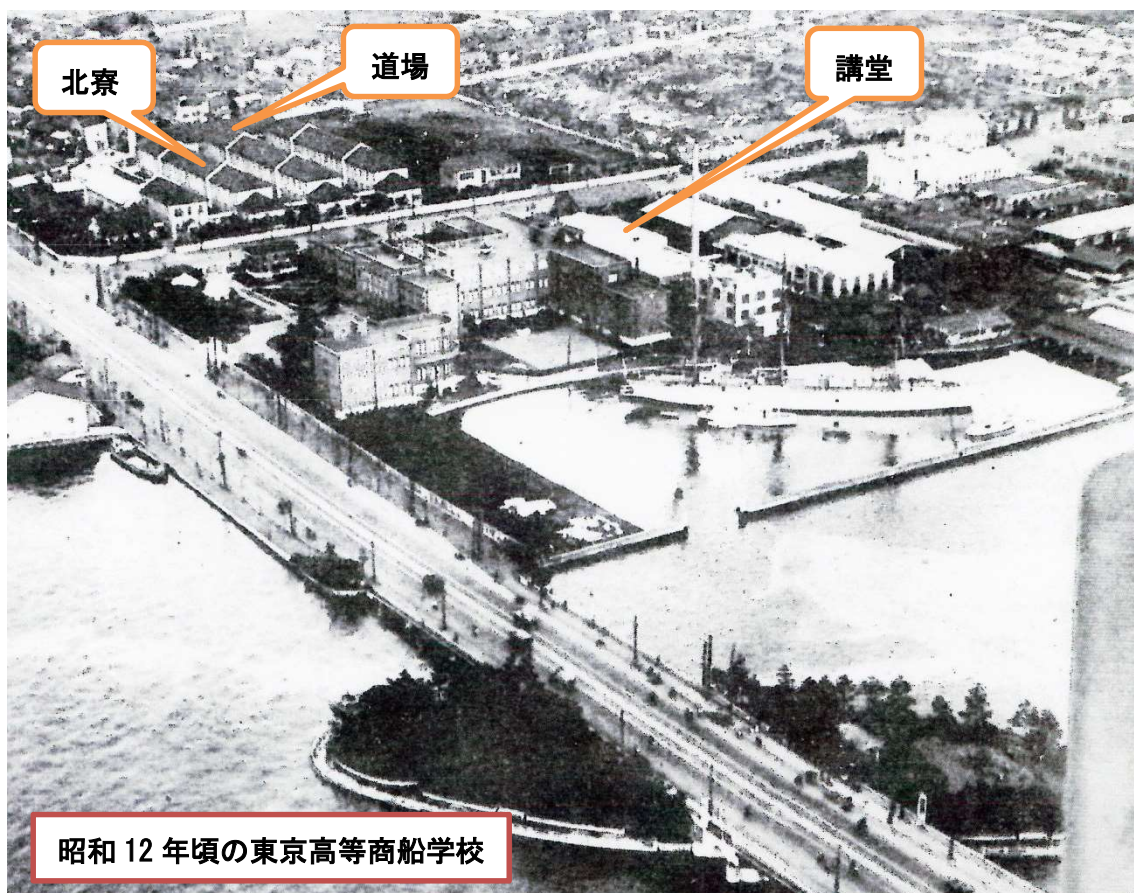
年月日：昭和14年1月9日	3. <b>軍歌練習</b> 軍艦旗の歌
イベント名：観閲式終了後 軍楽演奏	4. 大行進曲 「勝利」 ライヘルム作曲
会場：講堂	5. 序曲 「舉國の歡喜」 江口夜詩作曲
指揮者：椿原海軍々楽兵曹長	6. 行進曲 「軍艦旗」 海軍軍楽隊作曲
曲目：	7. 邦楽 「都の春」 海軍々楽隊編曲
1. 国歌	8. 歌劇「アイダ抜萃曲」 ヴェルデ作曲
2. 外国々歌	9. 行進曲 「愛国」 瀬戸口藤吉作曲
満洲國、暹羅國、英國、	10. <b>校歌 東京高等商船学校</b>
獨逸ナチスの歌、	山田耕柞作曲
伊太利ファシストの歌、	
今日ばかりは越中島の豪華版美しく勇ましき樂の音に心気共に爽快を覺ゆるものがあつた。	

年月日：昭和18年8月31日	3. 長唄 元禄花見踊 海軍軍楽隊編曲
イベント名：海軍軍楽隊 演奏会	4. <b>軍歌</b>
会場：神戸高等商船学校 校庭	イ. 海の歌 海軍軍楽隊作曲
指揮者：指揮隊長 鈴木 栄	口. 艦隊勤務 江口夜詩作曲
曲目：	5. 變奏曲 荒城の月 海軍軍楽隊編曲
1. 行進曲軍人勅諭 海軍軍楽隊作曲	6. 描寫曲 豊年祭 海軍軍楽隊作曲
2. 接続曲 時局の響 海軍軍楽隊編曲	7. 行進曲 軍艦 瀬戸口作曲
全聴衆は等しくこの妙曲に陶醉して暫時我を忘れた次第である。	

#### (4) 会場

東京高等商船学校における演奏会場は寮地区にあった道場と校舎地区にあった講堂であるが、現在は何れも存在していない。

この講堂は筆者が昭和 36 年に入学試験を受けた会場であり、入学後には学生祭前夜祭のダンスパーティ向けダンスレッスンが行われたところであり、全学生が会食を行ったところであるのが思い出される。小生が入学した時から卒業するまで過ごしたのは北寮 25 室である。寮地区の建物は全て建て替えられているが、校舎地区に残っている建物は、殆ど歴史的建造物で文化財となっている。



#### (5) 軍楽隊演奏の校歌・寮歌・船歌の SP レコード

東京海洋大学の越中島キャンパスにある百周年記念資料館には、帝国海軍軍楽隊演奏（内藤清五指揮）の SP レコード二枚が収蔵されている。

「東京高等商船学校学生歌」には、商船学校旧校歌〈総帆追風に〉と商船学校寮歌〈吾が越城〉が収録されており共に作詞・作曲者不明である。

〈進徳丸船歌〉は昭和 12 年頃に作られた進徳丸作詞、富田碎花補詞、海軍軍楽隊作曲の神戸高等商船学校の船歌である。



レコーディング風景(?)の写真は「指揮者内藤清五」を検索した時にヒットしたものであり撮影年月は不明であるが、レコーディングの雰囲気分かる。

何れのレコードも下記の曲名でウェブ検索すれば視聴することが出来る。

A25 暁にひびく、 A26 総帆追風に、 A27 吾が越城、 A28 進徳丸船歌



校歌 東京高等商船学校  
(暁にひびく)



東京高等商船学校学生歌  
(総帆追風に、吾が越城)



神戸高等商船学校練習船  
<進徳丸船歌>



レコーディング風景(?)

## § 「明治丸」航路標識視察船時代の活動について §

正会員 都築雅彦

東京海洋大学越中島キャンパスの重要文化財「明治丸」は、明治 8～29 年にわたり航路標識管理所所属の燈台視察船として、日本各地の燈台建設位置の選定、測量、資材輸送などの業務に業務に従事する傍ら、小笠原諸島領有、明治天皇の巡幸、壬午事変などの業務にも従事しており、その活動の様子は東京商船大学編纂の「明治丸史」に記載されているが、本船動静は各案件毎の記録資料に基づくもので、視察船時代を通した記録によるものではない。

このため、予てより視察船時代を通した記録を探していたが、昨年、国立国会図書館資料の検索方式が改善され、明治 16 年から刊行された「官報」の記事がインターネットで全文検索できるようになり、「明治丸史」の空欄をかなり埋めることができた。

明治政府が政府方針、行政法案などを周知広報するものとして、明治 16 年から官報による方式が採用されてきたが、初期の官報には、法律の公布、政府役人人事から灯台の開設、鉄道時刻表、国家資格者など、かなり細かいことまで記録されており、燈台視察船「明治丸」の動静も、記述内容にむらがあるものの記録されている。

（「国立国会図書館デジタルコレクション」>「官報」>「明治丸」、「発刊何月日」で検索できる）

それらによると、灯台の見回り、建設候補地の選定測量、燈器、燈台資材、燃料(灯油類)の補給の業務に加え、いろいろな業務にも従事しており、興味ある航海記録が残されている。  
(後出年表に赤字で記載)

- ① 明治 15 年：香港から北米ポートランドに向かっていた MaryTatham 號が襟裳岬で座礁、沈没し、助かった乗客乗員 740 人を函館まで運んだり（北海道博物館レポート）、
- ② 明治 18 年：海軍の業務に従事(貸渡)して、七尾港で暗礁に触れてプロペラを折ったり、
- ③ 明治 20 年：フランスで新造海軍防護巡洋艦「叡傍」が日本回航中(明治 19 年 12 月)行方不明となり、その捜索に従事したり、  
(この航海は冬場の終始難航した航海で、顛末が詳しく出ており、別途紹介するつもり)
- ④ 明治 20 年：硫黄島探検のついでに、小笠原航路の定期船となって乗客や貨物を運んで商売したり
- ⑤ 明治 26 年：日本人初代の船長中尾昌清の船長発令時期(明治 27 年 11 月 26 日発令)が明治丸史、航路標識管理所年報などと異なる。などがある。
- ⑥ また、明治 30 年～：商船学校に移管後の改修工事の入札公告なども残っており、それによれば、3 檣への改修工事は明治 33 年ごろだったと推定される。

「明治丸」燈臺視察船時代の活動

出所:東京商船大学編「明治丸史」:(史)

:国立国会図書館デジタルコレクション・「官報」:(発刊番号)

年月日	●就航目的、〈仕向地(確実なもの)〉、	(史)「明治丸史」,(官報番号)
1875 (明 8)	《工部省燈明台局所属燈台船 テーボール号と明治丸の2隻体制》	
2/20	《横浜到着》	
3/5	●横須賀造船所行幸の還幸お召船	〈横須賀〉 (史)
11/21-12/16	●小笠原領有確認	〈父島〉 (史)
1876 (明 9)		
1 月	●江華島海軍に石炭輸送	〈対馬〉 (史)
7/1-20	●北海道東北大巡幸還幸のお召船	(史)
		〈金華山・釜石・青森・函館〉
8 月	●青森/函館海底電線修繕、復航に巡幸要人を出迎え	(史)
		〈青森・函館〉
11/6-	●紀州沖の軍艦雲揚の救助	〈 ? 〉 (史)
1877 (明 10)	《2~9 月西南戦争》	
2 月-	●大和京都行幸に供奉、行幸中鹿児島私学校士族が蜂起、西南戦争となり有栖川宮の派遣取止。陸軍要人を博多に送る	(史)
		〈神戸・博多・神戸〉
6/27- 8/19	●本州南岸・瀬戸内・九州西岸・鹿児島島の航路標識巡視	(史)
		〈神戸・内海・鹿児島〉
	《西南戦争中であり、偵察、軍隊輸送などがあったのではないか?》	
9/28- 11/10	●本州東北・北海道・佐渡の標識巡廻	〈室蘭・函館・佐渡〉 (史)
1878 (明 11)		
1/23- 3/28	●西南海岸標識巡廻	〈 ? 〉 (文化庁)
5/13- 6/28	●東北海岸標識巡廻	〈 ? 〉 (史)
9/6- 11/6	●東北海岸標識巡廻	〈 ? 〉 (史)
1879 (明 12)	《テーボール号売却、燈台視察船は明治丸 1 隻となる》	
2/4- 3/24	●西南海岸標識巡廻	〈 ? 〉 (史)
4/12-	●琉球併合で那覇往復	〈那覇〉 (史)
5/15- 6/7	●東北海岸標識巡廻	〈 ? 〉 (史)
1880 (明 13)		
	●肥前口之津燈台点燈	
	●島原津の西燈台、長崎平瀬礁標識設置	〈 ? 〉
1881 (明 14)		
	●長崎蔭の尾島、敦賀立石岬の燈台設置	〈 ? 〉

1882 (明 15)		
5/17-	●北海道西岸標識測量、復航に襟裳岬で座礁沈没した英国船 MaryTatham 号の乗客乗員 750 人を幌泉から函館に移送 〈函館・小樽・函館・幌泉・函館〉	(北海道博物館研究ノート・山田伸一)
8/5-28	●朝鮮壬午事変(公使館破壊)で朝鮮に出動 〈馬韓(下関)・仁川・馬韓・仁川・馬韓〉	(史)
9/2-28	●公使館再築資材を仁川に輸送 〈馬韓(下関)・仁川〉	(史)
1883 (明 16) ((7月～「官報」の刊行始まり、明治丸の動静記載始まる))		
4/10- 7/12	●工部少技長同乗、沿海標識の補油補給・運用状況巡検、 ●新燈台建設地調査 〈東海・神戸・内海・関門・奥尻・宗谷・釧路・襟裳・室蘭〉 《官施設は維持管理良好であるが、私設燈台などは整備不良が多いこと判明》	(13,23)
11/5-11/18	●西南海岸標識巡廻 ●羽根田浮標交換 (浮標は数か月毎に交換していた)	〈 ? 〉 (108) (124)
12/14	●西南海岸標識巡廻	〈 ? 〉 (139,142)
1884 (明 17)		
	《前年の工部少技長による燈台検分結果の報告》	(171)
3/7-18	船底清掃、小修繕で横須賀造船所入渠	(233)
4/21-6/26	●標識資材・補給品輸送、標識建設企見地測量 〈東海・内海・日本海・江刺・神威岬・根室咲〉	(241,261,314)
1885 (明 18) ((逓信省燈台局所属船)) (9月:共同・三菱合併、日本郵船となる)		
4/1-10	●北海道渡島葛登支岬燈台資材輸送・巡廻 〈函館〉	(523,532)
4/7-25	●海軍省に貸渡 〈 ? 〉	(541)
5/21- 6/21	●東北海岸標識資材輸送・巡廻…(日時に混乱あり) 〈 ? 〉	(539,556,557,588)
7/3- 8/16	●全国の標識巡廻・資材輸送 〈 ? 〉	(577,616,641)
8/17	●富津浮標交換	(641)
8/25-	●海軍省に貸与、樺山海軍大輔、仁禮海軍中將を室蘭/ 函館 /青森下安渡に送る 〈室蘭・函館・青森〉	(648) (666)
9/4- 9		
9/25-	●横浜出帆 〈 ? 〉	(669)
10/21	●能登七尾港で座礁・右プロペラ 4 枚折損、翌 22 日出帆、23 日敦賀入港 〈七尾・敦賀・ ? 〉	
11/16	●横浜帰着	(717)
12/17-24	横須賀造船所入渠修理 〈横須賀〉	(742,749)
12/28-	●西南海岸標識巡検・資材補給出発 〈 ? 〉	(751)

1886 (明 19)		
2/12	●西南海岸から帰着	< ? > (783)
4/20-29	横須賀造船所に入渠・船底清掃	<横須賀> (848)
4/23-7/3	●燈台局長同乗、全国燈台を巡廻	< ? > (840,905)
5/6-7/3	●標識巡廻・資材補給	< ? > (857)
11/18	●郵船美濃丸通船の危機を見て、本船端艇で 22 名救助	(1022)
12/28	●12/3 シンガポール出帆後行方不明の新造軍艦「畝傍艦」の搜索に、本船と郵船「長門丸」の投入となり、関係者集まり搜索方法を打合せる	(1099)
1887 (明 20)		
1/1- 2/11	●「長門丸」と連携して「畝傍艦」を搜索、 <小笠原・神戸・関門・厦門・香港・マニラ・台湾>	(1078,1093, 1098,1103)
5/10- 6/25	●南海海岸標識巡廻	< ? > (1160,1198)
7/20- 8/19	●東北海岸標識巡廻	< ? > (1248, )
10/19	((「畝傍艦」亡没、乗員死失と認定))	(1293)
11/1-17	●小笠原航路に定期船として配船、学術調査で理科大助教授ほか研究者 2 名同乗 鳥島・硫黄島探検(移住調査) <三宅島・八丈島・鳥島・硫黄島>	(1291,1305 )
1888 (明 21)		
5/2-	●西南海岸標識巡廻	< ? > (1450)
7/5-10	●検疫施行で船舶検査船となり、後に郵船浦門丸と交代	(1511)
1889 (明 22)		
4/- 6/7	●一等警視他同乗、東北海岸標識巡廻	< ? > (1727,1785)
6/21-	●逓信省モントジョイスカイヤー同乗、西南海岸巡廻 <?>	(1789,1795)
1890 (明 23)		
8/1-	●門司から神戸に入港、船内でコレラ(虎列刺)患者発生(後死亡)、和田岬で船内消毒、停船、8/5 横浜向け出帆(和田岬船でコレラ発生したのは明治丸のみ) < ? ・門司・神戸>	(2128,2130, 2141)
	●北海道・根室～四国南岸燈台資材輸送、 ●津軽海峡海底電線沈布、恵山崎燈台資材輸送、 <根室・横浜・陸奥佐井・函館>	< ? >
	●内海海底電線沈布 横須賀造船所入渠	<赤間関> (史) (史)
10/28	●逓信省技師が鹿児島、沖縄、長崎へ明治丸で出張 <?>	(2201)
1891 (明 24) ((逓信省航路標識管理所所属燈台視察船))		
7/7-30	●室蘭/森、佐渡の海底断線敷設	<室蘭・森・佐渡> (2421,2427)
11/9- 12/17	●西南海岸標識巡廻、測量	(2511,2544)

1892 (明 25)		
5/2	《船長 J・F・アルレン、一等機関士 W・G・カメロンに勲章授与》	(2724,2959)
6/10-7/9	●西南海岸標識巡廻、企見調査	< ? > (2713)
6/14	長門海峡暗礁調査、不存在確認	(2699)
8/2-	●東北海岸標識巡廻	< ? > (2733)
9/19-24	●東京湾浮標修繕・交換	(2777)
10/3 -翌年	石川島造船所入渠・ボイラー交換、操舵室新設	(史)(造船所記録)
1893 (明 26) 《航路標識管理所官制改正》		
5 月	石川島造船所出渠、浅瀬に坐洲	
7/9-	●長崎/五島海底電線沈布、西南海岸巡廻	<長崎・福江> (3014)
10/3-30	●東北海岸標識巡廻	< ? > (3082,3104)
10/30	《航路標識管理所官制改正》	(3103)
(11/1)	<u>《アルレン船長解任?》(中尾昌清が船長となる) 注1</u>	<u>(史)(灯台史)</u>
11/10	《官制改正により 11/10 中尾昌清は技手から技師に昇任》	
11/14	《11/14 付辞令: 船舶司検所司検官伊藤治三郎 明治丸監督トシテ西南地方出張ヲ命ス、 航路標識管理所技師中尾昌清明治丸船長心得ヲ命ス》	(3115)
12/4-	●西南海岸標識巡廻出帆	< ? > (3132)
1894 (明 27) 《官設標識が 126 か所になる》		
1/12	●長崎立神の暗礁測量	<長崎> (3169)
1/21	●西南海岸標識巡廻から帰港	< ? > (3168)
5/16- 6/27	●西南海岸標識巡廻、八代海で暗礁発見	< ? > (3262,3298, 3308)
7/7-8/2	●紀伊日ノ岬新燈台資材輸送	< ? > (3308,3331)
8/12- 9/19	●対馬の燈台資材輸送	<対馬> (3338,3370)
9/23- 11/11	●東北海岸標識巡廻	< ? > (3374,3414)
11/26	《11/26 付辞令: 逓信省航路標識管理所技師 中尾昌清、汽船明治丸船長ヲ命ス》	(3425)
12/16-31	●紀伊日ノ岬燈台、他新設燈台資材輸送	< ? > (3443)
1895 (明 28)		
2/7	《乗組員機関部油差 19 人が海軍に献納金 6 円 10 銭》	(3497)
2/28- 3/16	●肥前呼子/壱岐郷ノ浦海底電信線沈布	<唐津> (3500,3513)
4/15- 5/26	●西南海岸標識視察	< ? > (3535,3571)
6 -9 月	●朝鮮沿岸燈台位置測量	< ? > (史)
10/1- 11/22	●東北海岸標識視察、新設予定地測量	< ? > (3680,3724)
12 月	《船舶検査證書 343 番受領》	(3802)

1896 (明 29) 《航海奨励法、造船奨励法制定公布》			
4/27- 6/14	●西南海岸標識巡廻	< ? >	(3846,3889)
6/9	《燈台豫定位置の測量・建設の方式改訂》		(3882)
7/3- 7/17	●東北海岸標識巡廻	< ? >	(3904,3943)
?	《商船学校に移管》		
1897 (明 30) 《商船学校所属繫留練習船》			
11/11	練習船明治丸	修繕工事入札開始	保証金 730 円
12/6	同上		保証金 800 円に増 (4330)
1898 (明 31)			
4/4	修繕既済部検査官に学校教授を任命発令		(4424)
1899 (明 32)			
4/26	装帆改造工事入札開始		
1901 (明 34)《年末時船名録では「登簿汽船、2 檣スクーネル」			
6/18	修繕工事入札開始		(5386)
8/9	繫留換工事入札開始		(5431)
12/25	越中島ポンドに定繫		
1902 (明 35)			
1/28	越中島での修繕工事入札開始		(5568)

注1:

明治 38 年 8 月刊行「航路標識管理所第一年報」では、「 J.F.アルレンは、明治 6 年 1 月～10 年 12 月を「テーボール号」の一等士官(航海士)、16 年 1 月～26 年 10 月 31 日「明治丸」船長」となっており、26 年 11 月 1 日より中尾昌清が船長となった」としているが、中尾昌清船長の官報による逓信省発令船長辞令は 11 月 26 日である。

注2:

「明治丸」の活動で、日本沿岸の主要な岬、埼、暗礁などには次々と標識が建てられて、明治 18 年ごろからは休む間もなく各地へ巡廻しており、客船仕様の本船では燈台資材や補給品(点燈油)の輸送が困難になってきたようである。また、海軍などでは「外国人に主導させず、そろそろ日本の方針で整備していく」との意見が出ており、明治 26 年の建設、維持の方針変更になった模様。

## § ウェルニーの辞任と肥田浜五郎の宮内庁入り & 国立銀行創立 §

正会員 澤間讓治

前号でウェルニーとサバチューーに明治天皇から勅語が下された旨を述べたが、本号ではその内容と、ウェルニーが辞任に当たって書き上げた横須賀造船所に関する報告書、そしてウェルニー辞任後の肥田浜五郎自身のその後の職歴を追ってみたい。

### ウェルニー&サバチューーへの勅語

ウェルニーに賜った勅語は以下の通り

『我邦造船界を創設せし以来十ヶ年の久しき、汝首として其職を奉じ、能く其力を効し、諸場の建築及び我新造艦船より内外修理の艦船其他の製造事業に至る迄、一に之を担当し、遂に今日の成績を見る。是れ実に汝の功劳朕深く之を嘉賞す。且汝が帰路恙なきと将来の幸福とを望む』

サバチューーに賜わった勅語

『我造船界を創設せし以米十ヶ年余の久しき、汝医業を以て其職を奉じ、能く其力を効し、諸内外官員併に諸工より近傍の人民に至る迄、汝依て生命を保し、病痾を癒す者幾許か、是れ実に汝の功劳朕深く賞す。且汝が帰路の恙なきと将来の幸福を望む』

二人はそれぞれ勅語に対する奉答文を清水少匠司の訳でささげた。

明治九年一月十八日医師サバチューーは仏国郵船で帰国の途についた。ウェルニーはしばらく横須賀造船所顧問をしていたが、明治九年三月十三日横浜港から仏国郵船「タイナス」号に乗船し帰国の途についた。

### ウェルニーの報告書

明治九年二月二十六日ウェルニーは帰国にあたって、首長在職中に経験した横須賀造船所創業以来の状況を日本政府に報告した。六項目にわたるこの報告書でウェルニーは、本造船所に対する将来の希望を最後に述べている。その要旨は以下の通りだが、これは肥田浜五郎の横須賀造船所に於ける事績をも浮き彫りにしている。

〈以下は横須賀海軍船廠史よりの要点の抜粋〉

#### 1. 建築

横須賀造船所創業の際、日本ではまだ煉瓦、モルチエーの用法を知らなかった



物品格納庫などは煉瓦と木材とを併用して建てた。これは簡単だが石造りの家屋に比べると、何度か修理を要するので、倉庫、学校、庁舎などに応用するには不便であった。二つの船渠、三つの船台と海岸の築造工事は結果が良く、その工費も欧州に比べて甚だ少額であった。これは横須賀の地質が良く、野州産石炭、豆州産火山灰の効果にもよる。いま必要なのは東京港出入りの大艦巨船の修理に使う大船渠である。

## 2. 機械及び器具

機械及び器具は概ね慶応二年（1866）に購入。前年、肥田浜五郎が石川島に造船所を創設しようとし、旧幕府の裁可を得て、外国に注文した機械はすべて便利の良品で、その価格も低廉であった。ゆえにその過半は横須賀造船所あるいは横須賀製鉄所に採用する事ができた。そのうち小型のために不相当と認めたものは単に起重機と汽鎚などの数種に過ぎなかった。旧幕府がオランダから購入したローラー機械は慶応二年に横須賀造船所に送付された。しかしその後組立工事の着手に躊躇したため、今もまだ実際に利用する事が出来ないのは私の最も残念なところである。製鋼工場の機械は全部整備したので、日本産あるいはマニラ産の麻を原料として海軍に必要な綱索を製するに十分である。肥田氏の注文した機械のうち役に立っているものはすべて横須賀造船所の経費にその価格を算入したが、今もなお日本海軍で必要と認めない各種に製鋼機械は、これを財産簿に記載していない。その他アームストロング砲なども同様である。

## 3. 人 員

横須賀造船所に雇用した仏人は創業時四十四名であったが、次第にその数を減らして、現今二十五名だけである。しかし最近赤松少将の改定された新例規によると、これで工場の監督、生徒の監督等に十分である。日本人の現員は判任官七十二名、等外吏百二十一名、番人二十名、筆算雇二十七名、職工千三百四十四名、請負職工及び人夫百名ないし四百五十である。負傷者は平均一日につき、千名中軽症者一名。一分七厘（1.7%）の比例で、近来重傷者は少なくなった。

## 4. 学 校

造船学校は旧幕府の創立で、当時伝習生徒を江戸および横浜から選出し、職工生徒を横浜付近から募集した。創立以来二年で学則を改正したが、明治元年政府の命により造船学校再置の建議で、同五年に正則、変則の二校を開設した。

正則学校生徒は三十七名、学級は五等に区別し、日仏二国人の教員七名で教授している。最上級生には海軍技士の職務を実際に講習させているが、造船学および蒸気機械の課定は今も十分でない。また本校はもとより文学者の養成に適しない。正則学校生徒成業せず退学した時は造船所で応分の職務につかせる。

変則学校生徒の現員は五十余名でその学級を五等に区別し、日仏二国人の教員七名で教授、造船学校再置以来、年少士族の者は工業により立身の道を求める志を抱き、次第に変則学校に入学する者があるので、従来在学の平民生徒も、これに対して学力を競い、お互いに努力して学校の面目を改新した。

生徒一名の費用は正則学校が一年二百三十円、変則学校は百四十円で、この費用は校費、教授料などを含んでいる。

## 5. 製造及び修理

工業の監督はチボチー氏の本務で、明治四年以来その監督を経て竣工した。製造および修理の物件は以下の通り。

◎生野鉦山寮出張所の注文機械数種 ◎軍艦清輝 ◎運送船迅鯨並びに函館丸  
◎河船利根川丸二隻の修理 ◎その他国内船百六十二隻、外国船百一隻の修理に従事した。

造船事業の盛衰は艦材供給が十分か否かに関係があるので、慶応三年六月旧幕府の時代、材木掛をおき、維新以後には佐野工部大丞がこの事業にすこぶる熱を入れた。明治六年肥田浜五郎は政府に申請して仏国料木技師を造階所に雇用したが、今になって考えると政府はこの事業を等閑に付した感がある。

横須賀造船所が今日の隆盛を招いたのは、商船および外国船の修理事業が大いに役立っている。私は今後も大いに海軍部外の艦船を修復して造船所の利益を増すのが得策だと思う。まして東京湾内には海軍造船所をこれ以上造れないからなおさらである。

## 6. 経費

明治四年以前の経費は政府に報告済みで、金四十七万四千三百三十円。それ以後明治八年までの経費金額は金二百二十四万五千七百六十七円。（以下略）

## 7. 結論

横須賀造船所の状況はすでに六項目にわたってその趣旨を報告した。一、二にあげた事項などは現在もなお多少の欠点なきにしもあらずだが、私が旧幕府のために提出した予算額を超過しないで、所期の目的をすることは当然であった。学間の進歩しないことは私の最も慨嘆にたえないところであるが、そもそも所轄官庁がしばしば変更して一定の学則を継続することができなかつたことがその一大原因である。

私は日本政府の命により途中で横須賀を去ろうとする。以来日本政府は適宜の方針をもって造船所の工業および学事を共進し、数年もたたずして日本創立の造船所に完全な好結果を得、これによりその名声を世界万国に彰揚させることができれば私の最も喜ぶところである。

このような報告書の内容から見てもウェルニーと言う人物は誠実且つ有能な技術者であり、管理者であった事が伺われる。

### 肥田浜五郎の主船頭辞任

ウェルニーが首長を解任された後、肥田浜五郎は一時病気になる、その間主船頭を解かれ、代わって九年一月二十三日、海軍少将赤松大三郎が主船頭及び造船所長兼任を任せられた。その後の肥田浜五郎は一時復職したが、間もなく四十七歳で海軍生活に終止符を打つ事になった。辞任のきっかけは岩倉具視からの宮内庁転職へのすすめがあったと推測されているが詳しい事情を示す資料が残されていない。

横須賀造船所は後に横須賀海軍工廠となるが、肥田浜五郎は小栗上野介亡き後、その当初の志とは違ったが、当該造船所の創設時代の一流の技術者として、又管理者として多大の貢献をなした事は万人が認める事実として歴史に足跡を残したと言える。彼は明治十五年海軍機関総監となった。

### 肥田浜五郎の宮内庁への転身

明治九年、肥田浜五郎47歳の時に長年携わった造船関係の仕事を離れて宮内庁へ勤める事になった。宮内庁への転身には岩倉具視による強い勧めがあったらしいが、丁度その頃に山岡鉄舟から肥田浜五郎宛てに書かれた次のような書簡が残っている。

拝見、昨日は参上の妨申上、特に御馳走相成、難有奉存候、其節御内話の通大輔へ委細申入候、今日大臣へ申談候様子、其運ビニ相成候事可奉存候。御用掛之儀も大輔承知いたし居候。右相答迄 恐々謹言

山岡鉄太郎

山岡鉄太郎(鉄舟)は当時、宮内省の大丞で侍従であった。書面の内容から察すると、一緒に会食しながら、今後宮内省で働くことについての希望を肥田が述べ、それを山岡が大輔(次官)へ申し入れ、大輔から大臣へ相談する運びになったことを報告したものである。また御用掛として宮内省に勤務することも事前に大輔は承知している、というようなことが文面から推察される。

当時の大輔は今の次官で、宮内省は正三位万里小路博房、大臣は正二位徳大寺実則とともに公卿出身である。また宮内省御用掛は参議木戸孝允、長英、岡田善良、大河内正質、畠山義成の五人であった。

この事から肥田浜五郎が宮内省御用掛になることは岩倉具視などを通して、すでに内々にきめられていたと思われる。岩倉公は明治以後肥田浜五郎の才能を見抜き、技術

面ばかりでなく、理財面にも明るいことや、正確緻密な計画性、能率的な実行力があることなどを高く評価している。これはおそらく岩倉全権使節団の一員として、明治四年から六年にわたって欧米を視察したさい、肥田浜五郎と行動をともにして大使岩倉自身がみずから認めたところであろうと思われる。

それに岩倉公は維新前は討幕の急先鋒の公卿で、幕府を倒して明治新政府を樹立し、実力者の一人におさまったものの、次第に薩長土肥などの藩閥勢力が新政府に力を得、やがては藩閥政治が行なわれるであろうことを予測し、その事をにがにがしく思っていたらしい。しかし公卿出身の岩倉にはこれをおさえ、改革するだけの機構や勢力はなかった。藩閥勢力をおさえるには自分の回りに有能なブレーンをおいて仕事をさせるより手はないと悟って、岩倉は肥田のような有能なブレーンをおき、自分の手足として働かせると同時に、できるだけ薩長らの動きを封じようと考えた。そのためには、旧幕臣であってもさしつかえない。いまさら旧幕臣によって政府が転覆される恐れはないし、またむしろ旧幕臣の方が敵愾心や将来の栄達などを考えて一心に働くということもあると岩倉公らしい深慮遠謀もあったと思われる。しかし肥田浜五郎には謀略や政治は不向きであり、岩倉公もそれを承知でもっぱら肥田の緻密な頭脳と能吏ぶりを買ったのであろうと推測する。結局岩倉具視のブレーンとして働くには、宮内省のようなところが肥田には最も適していたと言えるかも知れない。

宮内省御用掛時代、肥田が御用掛として直接に手がけたおもな仕事は皇室財産の保全と熱海の吸気館の設立運営、熱海離宮の用地買収、箱根離宮の造営などであった。皇室財産は維新当時のどさくさで非常に乱れ、福沢諭吉などもその乱脈ぶりを嘆いていたほどであったが、肥田の宮内省入りとともに次第に整備されすっきりしたものとなった。その功によって明治十八年（一八八五）肥田浜五郎は初代の御料局長官に任命された。また熱海離宮造営の後に明治十八、九年に箱根離宮の造営も行なっている。

### 第十五国立銀行の創立

肥田浜五郎は主として華族の出資からなる第十五国立銀行の創立にも関係しているが、ここで明治維新後の日本の銀行制度の黎明期からの日本の銀行制度について若干の歴史を振り返っておきたい。

日本における銀行制度は当時の大蔵少輔伊藤博文のもとでその基本制度が創られた「国立銀行」とはアメリカのナショナルバンク（現在では国法銀行と訳すことが多い）の直訳であり、「国法によって立てられた銀行」という意味である。したがって民間資本が法律に基づいて設立して経営したものであり、国が設立して経営した銀行ではない。金貨との交換義務を持つ兌換紙幣の発行権を持ち、当初は第一・第二・第四・第五の4行が設立された。1876年（明治9年）の国立銀行条例の改正で、不換紙幣の発行や、金禄公債を原資とする事も認められるようになると急増し、1879年（明治12年）までに153の国立銀行が開設された（これ以降は設立許可は下りなかった。

銀行は設立順に番号を名乗っており、これを「ナンバー銀行」と呼ぶこともあり、2021年現在、数字のみの純粋なナンバー銀行は十六銀行・七十七銀行・百五銀行・百十四銀行の4行、統合前の行名を含むナンバー銀行は第四北越銀行と十八親和銀行の2行で、併せて6行が現存している。

なお、これらの他にも番号を含む名称の銀行は存在するが、八十二銀行は第十九銀行と六十三銀行が合併し、両者の数字の和を取って名付けられた銀行であり、第八十二国立銀行とは無関係である（但し、合併前の両行はいずれもナンバー銀行であった）。また三十三銀行は三重銀行と第二地方銀行だった第三銀行が合併し、両行名の漢数字の「三」から取った三十三（さんプラスさん）を漢字の三十三（さんじゅうさん）に見立てて名付けられたもので、こちらも第三十三国立銀行とは無関係である。その他、富山第一銀行も無尽会社を発祥とする第二地方銀行であり、セブン銀行も第七国立銀行とは関係がない。

1882年（明治15年）に中央銀行である日本銀行（日銀）が創設されると、翌1883年の国立銀行条例の改正と1884年の兌換銀行券条例により、紙幣発行は日銀のみで行うようになった。その後しばらくは国立銀行発行券が通用していたが、1896年に国立銀行営業満期前特別処分法が制定され、国立銀行券の発行が法律で停止され、普通銀行に転換することとなった。これは、銀行の成長を促すために国の管理下から民間に委譲する目的が含まれていた。

肥田浜五郎が関与した第十五国立銀行は勿論岩倉具視が主役を演じ、発起人となって奔走努力した訳だが、同時に蜂須賀、池田、細川、山内、亀井、毛利、伊達、松平、徳川等の各華族の協力も大いに岩倉具視を助けた。この第十五国立銀行は総代が岩倉具視、発起人に名を連ねるのは岩倉具視他、毛利元徳、徳川慶勝、藤堂高潔、松平茂昭、南部利恭で、全て旧大名だった。この人たちが幹部として明治十年三月二十一日、大蔵卿大隈重信から正式に銀行設立として認可された。しかし華族達は理財の才乏しく、対人交渉、事務処理能力も覚束ない状態で、岩倉具視はその事を十分に認識していたからこそ、欧米視察以来肥田浜五郎の誠実な人柄に加えて理財の才にも抜きんでたものを持つと見抜き、経理関係の一切を彼に任せた。後から考えると、こうした目論見があつて、岩倉具視が肥田浜五郎をして海軍省主船頭を辞めて宮内庁へ転身する様に勧めたのかも知れない。こうして肥田浜五郎は造船関係以外にもその才能を発揮する事になった。

次号では、もう一つ日本鉄道会社創設にも尽力した晩年の肥田浜五郎に触れ、残念ながらその創立に関わった鉄道事故で亡くなるという皮肉な結果を招いた彼の最晩年を述べさせて戴く。



特定非営利活動法人 日本海洋塾  
<NPO Meijimaru Memorial Academy>  
事務所: 〒135-8533東京都江東区越中島2-1-6  
東京海洋大学越中島会館2F  
TEL: 03-6458-5272  
FAX: 03-6458-5272  
E-Mail: [kaiyojuku5122@train.ocn.ne.jp](mailto:kaiyojuku5122@train.ocn.ne.jp)  
ホームページURL: <http://kaiyou-juku.org>